

【EES Seminar/IFES-GCOE Seminar 実施報告】

2010年12月7日-9日 ISAR-2 国際シンポジウム (IFES-GCOE 共催) に引き続き翌日 12月10日、北極域研究に関するワークショップ「EES seminar / IFES-GCOE seminar, Ongoing Arctic Ecosystem research under global change」を北海道大学大学院環境科学院にて開催しました。

本ワークショップは、北極域での生態系研究の第一線で活躍されている Elisabeth J. Cooper 博士 (Professor, Department of Arctic and Marine Biology, Institute for Biosciences, Fisheries and Economics, Tromso University)、及び David Hik 博士 (Professor and Canada Research Chair in Northern Ecology President, International Arctic Science Committee (IASC) University of Alberta)をお招きして行われました。

午前中には、環境科学院に在籍し、北半球高緯度域を研究対象としている学生6名の講演が行われ、午後はお招きした両氏の講演が行われました。両氏の発表について、その中の一つに、秋や冬の北極域にて雪面からのCO₂フラックス等に注目している研究の紹介があり、非常に印象的でした。筆者が研究対象としている東シベリアの場合、特に夏季の植物の生長期に焦点を当てるケースが多く、夏季のエネルギー・ガス・水フラックスを扱っている研究がこれまでに多く報告されています。それに対し、北極域において、気温が低下して地表面が雪で覆われてしまう秋～冬に着目し、その期間のCO₂フラックスが実は年間のフラックスの半分近くを占めることや、冬季の積雪等の状況で生長期の生態系の呼吸量等が様々に変化していくことなど、東シベリアとは異なる視点で研究を行っており、非常に興味深く感じました。このような、自分たちとは別のアングルから自然を見る姿勢は、今後自分たちが世界に飛び出して自然科学に関わる研究に従事する上で重要であることと思われ、参考になったと感じています。

講演後には両氏とワークショップに参加した環境科学院の学生、教官を交えて北極域における生態系研究の現状についての討論会が開かれ、活発な議論が行われました。

